

手助けをしてください



中村成信さん

道に迷う。地図を
順が分からない。越智俊二が
おかしいと感じたのは199
4年、47歳のときだ。福
岡市の内装工事会社
サッシの取り付けを
た。現場までたどり着
こともあった。

妻の須美子(59)は
いだらうと思った。20
いた営業畑から配転
ばかり。新しい職場は
車で片道2時間ほどか
毎晩2人で住宅地図を
わせ、翌日行く10カ所
現場の道順を確かめた
ある日、顔に青あざ
って帰ってきた。「什
んかして、殴られたっ
資材の発注を忘れたの
の日時を間違えたり」
れていた、と後で知る

柔道で鍛えた体が
り、皮膚が骨に張り付
うに見えた。「会社
言いに行こうと思いと
異変に気づいてから4
っていた。

退職から1年半後、
アルツハイマー病と診
だ。主治医に紹介され
ケア施設で陶芸や絵、
り始め、元気を取り
職員が越智の気持ち
聞き取り、文章にし
2004年10月、京
がれたアルツハイマー
際会議で、越智は演
だ。2千字ほどの文章
つ丁寧に読み上げる
私は57歳です。物忘
気になり、ずいぶん苦

の病
しんだ
れの時
万引きしたとして逮捕

やっと
断され
たデイ
書道を
戻す。
少しす
た。
都で開
病の国
に立っ
を一語
をいっ
た。

今年9月、認知症に
人の視点から医療や介
えようという勉強会が
た。医師や研究者に交
認知症の3人が呼びか
名を連ねた。

その一人、中村成信
神奈川県茅ヶ崎市役所
ていた。商工観光課に
きは、市内の海水浴場
出身の桑田佳祐(56)ら
ンドにちなんだ「サザ
ちちがさき」と呼ぶよ
した。06年2月にス
万引きしたとして逮捕

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた

「を」
「事」
「たい」
「工事」
「て怒ら」
「やせ細」
「いたよ」
「退職を」
「うと」
「年がた



越智俊二さん=2004年10月

でもいま
懲戒免職になった。
だが、中村には万引きした
覚えがない。後に前頭側頭型
認知症と分かった。その中で
も、ピック病というタイプだ
った。無意識に万引きをし
り、怒り出して他人ともめ
りするとう。

病名が1年後に報じられる
と、処分の撤回を求める活動
が広がった。支える会を引
張った元連合神奈川の事務局
長、野上高伸(71)は中村とは
顔見知りだった。妻の文子
(70)が50代後半からアルツハ
イマー病で、ひびくのではな
い。この時期、野上は文子の
徘徊に苦慮していたが、中村
にそれを告げなかった。

処分は停職6カ月に修正さ
れた。100%満足とはいか
ない。ただ、ピック病という
認知症が知られるようになって
た。中村は実質勝訴と受け止
め、定年を迎えた。

病気が治ったわけではな
い。電車で我先に座ろうとし
たり、他人のけんかに割り込
もうとしたりする。「自分
も自分が分からない。周りが
見えなくなっちゃう」。外出
には家族や友人が同行する。
週に3日は介護施設で庭仕
事を手伝い、趣味の写真撮影
に出かける時は、近くの田中
秀昭(73)に付き合ってもら
う。依頼があれば、体験を話
す。「認知症でもできること
はあると知ってもらいたい。
病気を隠さなくてもいい社会
になってほしいから」

認知症と歩む人を訪ねる。
このシリーズは岡本隆子
担当します。文中敬称略

患者ではなく人です

認知症のわたし②

人脈記

ニッポン
jinmyaku@asahi.com

認知症の人が、自らの体験を語す。その先駆けになったのは、豪州のクリスティーン・ポールの（63）だろう。2003年から07年にかけて4回来日、望むケアのあり方を話しを語った。

演じるで記憶をしまった引きまの鍵を一つずつなくして出ようです。

いふたちの記憶に残るのは何を言ったかではなく、言い方を。感情は分かりません。

で病名を背負いつつ、いかに向きに生きるかを学ぶ長い前序が続いています。

旅今日の日付を思い出せない。今うクリスティーンの話にと場中が聴き入る。

会場で認知症と診断され、政府の科学担当第1次官補を辞めた。独身で、3人娘の末ら立ち上がり、著書を出か、内外の同じ病の人と対話す。里ね、メールをやりとりしをから恩索を深めた。



若井晋さん（右）と克子さん

クリスティーンさん、中央が石橋と晋さん、右が石橋さん提供



クリスティーンは心奪われた。英辞典（）からないが、スライド語は分いい。足元に大きく開の絵がれ目を恐る恐るまたぐいた脚を手に鍵穴を探る人。

人。眺めてきた認知症の人た自分が持ちを的確に表現してちの気感した。

いるとば島根県出雲市でデイケア施設に収め、著書を買演をビ国して序文を訳してもう。帰クリスティーン本人がら、たと初めて知った。

認知症を探し、知人に京都翻訳社を紹介してもらった。出版州に向いて出版の了た。豪る。03年秋の来日にあ解を得「私は誰になつていく

わけ、が出た。精神科医の小の？」推薦文を寄せた。澤勲が人は何も分からないのだから

えい橋は認知症のお年寄りに石ちを手記にしてみたい、

「人は眼鏡をかければ困近視の。クリスティーンにはらながいた。認知症でもピポールあった補助があれば、ントのきと過ごせる」

に札幌で開かれた講演会で、かけた。このなかに認に問の人はいますか。「は知症の手を挙げたのが若井晋

（65）が外科医。前年まで東大元だった。01年6月9日深教授新しいノートを開いて書夜、また。単純な漢字がすくき付て来ない。Dementia

に出知症）か。頭部のMR（認知を自分で撮り、見たこI画める。専門医に診てもらともさ4年半かかった。

うまの克子（66）とは、病を公表はないと始まらないと話し表した。2年前、重い病にな合つたの語りを映像で残すN

ったパイペックス・ジャパンPOでして録画を済ませた。に協か思うようになくなっ言葉は、講演会場でこの映像た今。克子の説明を交え、を流する形で話を進める。

普段通りに暮らしたい

認知症のわたし③

人・脈・記

ニッポン
jinmyaku@asahi.com



① 藤原瑠美さん

② グスタフ・ストランドルさん



(岡本峰子)

1988年暮れ、東京都大田区に住む藤原瑠美(65)は、81歳になつた。母かをるの声で台所に向かう。「瑠美ちゃん、どうしよう。紅茶の入れ方がわからない。紅茶の入れ方を教えて」。果物、紅茶の朝食をパンと用意していた。それなのに台所に布巾を包丁が散らして、姿で髪を整えた母が、体を震わせていた。「大丈夫ある」。平静を装って肩を抱いた。薄々気づいてはいたが、暮らし。東京・銀座の高級百貨店「和光」で宣伝企画部長をしながら介護する、と決めた。「あれも明るく」。認知症という言葉はまだなかった。神経外科の医師は「1、2ヶ月で完全な寝たきり痴呆になる」と言った。だが、かをるは寝たきりにならなかつた。寝かせたままにしなかつた。ベッドから起き上がる。トイレまでの3歩を歩けるように歌でリズムをとる。言葉を知らせた。5人き声で尿のケアチームは、泣き声の連綿で意図した。8年後

までオムツなし。週に1度は美容院で髪をセットし、明るい色の服を身につけた。給与の大半は介護費に消えた。かをるを自宅で見とってから5年後、2005年に藤原はスウェーデンを訪ねる。映画「安心して老いるために」の監督、羽田澄子(86)がつくった北欧の資料ビデオをみて、認知症の人に対応するスタッフの表情が明るいのに驚いた。日本の特別養護老人ホームの介護士は疲れきっている。どうしてこんなに違うんだろう。

人口3万人のエスロプ市。市内にされた認知症のデイサービスでは、管理者だと思っただけのあいつが利用者だった。おしゃれな服、思い思いの髪形、伸びた背筋、笑顔。誰が認知症なのか、言われなければ分からなかった。

市の高齢者リハビリ部門の責任者スタッフファン・オルセン(49)は「安心して過ごせれば、認知症の人は自分の力を発揮できる。人と話し、体を動かす。居心地よくすること。が何より」と教えてくれた。

藤原は現地に5回足を運び、計230日間滞在。現場の職員やみどりまで担当訪問スタッフ、市長らにインタビュー

ユーシ、その成果を09年、「ニルスの国の高齢者ケア」に著した。

エスロプ市を藤原に紹介したグスタフ・ストランドル(38)は当時、日本でスウェーデンの福祉やケア方法を紹介する活動をしていた。

ストックホルム近郊で生まれ、中学時代に剣道に出会って日本に憧れた。高校2年のとき、最初の留学で10カ月滞在。多くの人に「スウェーデンは福祉の国だね」と言われる。二つの国を結ぶ役割を果たしたい。興味の対象が剣道から福祉にかわった。

大学生だった97年、留学生として再び来日した。東京の北欧料理店で経営者に自分の夢を語っていると、「詳しい人が来てるよ」。紹介されたのが、建築家で京大教授の外山義典(52)だった。

外山はスウェーデンに7年留学し、高齢者の住環境を研究した。89年に帰国すると、相部屋が当然だった特養ホームに挑む。個室ながら共用スペースで家庭的な雰囲気もある施設を次々手がけた。02年に52歳で急逝する。

グスタフは外山の自宅に招かれて話し込んだ。日本で訪れるべき老人施設を紹介してもらい、これまでざつと300カ所に足を運んだ。認知症の人がベッドに縛りつけられているのも見た。

09年、有料老人ホームなどを運営する千葉県浦安市の舞浜倶楽部を任せられた。「日本は少子化の中で、介護にかけられるお金も人材も足りていない」。理想を實踐してと請われた職場で、手腕が問われている。

動くだけが介護じゃない

認知症のわたし④

jinmyaku@asahi.com



いつみ・ラワーセンさん(左)とベントツさん

デンマークの海辺の街ボーデン。前、日本から移り住んだ。言として働く。でヘルパーがいることがある。心がけてすぎない。「本人手を出し事にする」「できることを大々やるように介添え」。両親して体得した。年寄りを介年、デンマークの999「フホーム」で介護

「手を出し事にする」「できることを大々やるように介添え」。両親して体得した。年寄りを介年、デンマークの999「フホーム」で介護。症グル、足取りのおぼつかな。人が向がかかって、えに時じて待っている。着替は見守「ことだけを手伝」。きないは彼らの生活の助。私たちが言う。手だ。から「いのにたばこを吸。皿がな職員は動かない。灰。めてもがの入居者が灰皿。と、ほる。認知症の人同。支え合夜で掃除する。た灰をば、動き回ってお。日本でがよい職員。ここ。するの。奈して、この人は。よく餓何ができないの。か、何を大はかりがいいこ。す。動。を。探。やない。島崎県出身。18歳。とい。つみは病が脳卒中で倒れ。き、母が動かず、言葉も。右半身。

失う。自宅での介護を義妹が代わってくれて、30歳で福祉の専門学校に入った。最初に働いた介護老人保健施設では、時間に追われた。朝は入所者を起こして身支度させ、車いすに座らせて廊下に並べる。別の職員が左右の手で1台ずつ押して食堂へ。食事は1人の職員が3人を食べさせる。食事が終わると、歯磨き担当の職員に渡す。おむつは3〜4時間ごとの定時交換。汚れていてもいなくても関係ない。工場の流れ作業みたいだった。

専門学校の頃から休暇や研修でデンマークは身近だった。通算2年4カ月滞在し、障害者施設長のベントツ(63)と2004年に結婚した。今、いつみが担当するフロアには、認知症やパーキンソン病のお年寄り12人が住む。1日のスケジュールは人それぞれ。昼夕食は一緒だが、自室で食べる人もいる。いつ



青木憲一さん

のゴ首はカールした白髪に真珠飾りが似合う。かかとのが3センチほどあるパンプスつも履いている。も、いつみは「これが理想は思っていない。職員には、おむつが汚れていたら知らん顔をする。担当する年寄りが亡くなっても、だと葬儀に参列しない。ドさにはついていけない。

洋画。前年。イ。年。前。近。くに住む日本人たちで数まで年末に餅つきパーティーをしていた。その一人、家の青木憲一(86)はデンク在住45年になる。描きになりたくて41歳の横浜港で船に乗った。セ(68)と出会って結婚、をもうけた。欧州各地をめぐり、海や湖、川、空を油に。4年前まで日本で開催を聞いていた。昨。年6月、アルツハイマー病と。診断される。もの忘れは。だが、病氣と思わなかつ。オーセによると、電動草機に使う油を間違えた夜中に家の中を歩き回った。得意だったコロツくりもしなくなった。絵はおっくうになったと。日本から取り寄せた5の筆ペンで水墨画のようを描く。週2回通うデイビスでも、施設の庭で画に向き合う。

「幸せだ」と言う。みはこの夏、青木と久りに会った。「私に油絵けないけど、料理なら手。一緒にやれば、青木もまた日本食をつくれる。す」。異国に長く暮ら。施を手助けするのも、自。役割だと思っている。

「私に油絵けないけど、料理なら手。一緒にやれば、青木もまた日本食をつくれる。す」。異国に長く暮ら。施を手助けするのも、自。役割だと思っている。

(岡本隆子)

起き入浴。時間もその人にあわせ。104歳のカミラ・ハ。

すごいぞ ご近所の力



前原剛さん



木村薫さん

福岡県大牟田市の白川校区。昨年8月23日夜、40人ほどの住民が集まり、校区内に一人である杉野ツユ子のことを話し合った。近所の前原剛(74)が呼びかけた。ツユ子は86歳。脳卒中を起し、数年前から認知症になつていた。近所の家のドアをこじ開け、窓越しに声をかけた。朝、車が多い道路を渡って、出歩いた。食事には、毎朝、次男の広美(60)が肩を叩いて、ツユ子が高齢者住宅に移すこともやむを得ないと考えていた。なせ出歩かたどった。朝行く古い記憶が、店街がある。昔方角には、蕎麦屋に勤めてらした。夕方に学校の方だった。50年前に息子さんを迎えた。「50年経たねえ。あの辺には大好きのカラオケの店、古いお土産の家……。地図がマークで埋まった。隣の部屋にいたツユ子にも意見を聴いた。「家におつても一人やつけん、おもしろな」。近所に住む人が1日に1回は家に帰ることにした。食事を前原らはカラオケ気にかけて、連れ出した。ツユ子は「こぼれればあさん一緒に」

連れとくと(奥さんを)やかすばい」と喜んだ。1カ月後、ツユ子は脳卒中を再発して亡くなった。「あの人のあったけん認知症でも家に住めるってわかった」。近所では今も話題になる。ツユ子がデイサービスで利用していた施設の責任者、木村薫(51)は、認知症の人が地域で住み続けるための工夫を住民と考えてきた。

「ご近所の力はすごい。認知症の人は、生活が急に変わると混乱する。近所の声かけで、変わらざるに暮らせた杉野さんはよかった」。看護師として勤めた老人病院で、認知症の人をベッドに縛ったこともある。「何もわかっていかなかった。収容するだけの介護だった。認知症の人を人としてみていなかった」と悔いる。

前原はNPO法人しらかわの会の事務局長。「こんな人、地域で支えんば、何のためNPOつくったか」と言つて、あの日の集まりに住民を誘った。NPOは大牟田市が2004年に始めた徘徊模擬訓練をきっかけにできた。訓練は、認知症の人が安心して徘徊できるまちづくりを目的にしている。町を歩き回

る。声のかけ方は事前研修しておく。校区は07年から、訓練参加者は9人、声かけ地域で声をかけあう。少なくなっていた。話したのはコンビニさんだけ」というお年寄り。障害者がいる家人親の家庭にも、声かに立ちそうだった。やべりサロンを開こう春、校区内でポラント募集したら、120人がくれた。河原の掃除が広がり、NPOを結成でになった。勉強会をとして訓練への関心を6年目の今年に参加2、声かけも300件余に増えた。

0に電話をかけること、ある病院の地域交流施設がある。徘徊訓練の世にきた経緯から、社会の猿渡進平(31)ら職員連絡役になる。ラーのリモコンが壊れた草が伸びた。たすすしたい。週に3、4件ことが寄せられ、NPNパーが出向く。猿渡一員として、掃除やパル、飲み会と休日返上回る。「正直、面倒くもあるけど、楽しいことたくさんある」。は、病院でお年寄りらの相談にのる。一人暮らし、泣く泣く施設にきてきた。それが変わってきた。今退院者の割合が自宅に戻る。地域があるからこぞだと思



猿渡進平さん

思。3わり入ら。の退。と。さ。で。ト。た。の。は。を。た。7。福。話。設。校。N。N。P。に。P。に。0。高。開。す。道。応。イ。と。の。機。は。最。に。に。ら。る。の。に。か。け。方。は。事。前。に。お。く。校。区。は。07。年。か。ら。、。訓。練。参。加。者。は。9。人。、。声。か。け。地。域。で。声。を。か。け。あ。う。少。な。く。な。っ。て。い。た。話。し。た。の。は。コ。ン。ビ。ニ。さ。ん。だ。け。」。と。い。う。お。年。寄。り。障。害。者。が。い。る。家。人。親。の。家。庭。に。も。、。声。か。に。立。ち。そ。う。だ。つ。た。や。べ。り。サ。ロ。ン。を。開。く。春。、。校。区。内。で。ポ。ラ。ン。ト。募。集。し。た。ら。、。120。人。が。く。れ。た。河。原。の。掃。除。が。広。が。り。、。N。P。O。を。結。成。で。に。な。つ。た。勉。強。会。を。と。し。て。訓。練。へ。の。関。心。を。6。年。目。の。今。年。は。参。加。2。、。声。か。け。も。300。件。余。に。増。え。た。

(岡本峰子)

家族の介護 奪わない。



福岡市中央区の住宅街に「宅老所よりあい」がある。築100年近い民家に、認知症のお年寄りが通ったり、暮らしたりしている。

7月24日午後、2年前からここに住む浜地幸子が最期の時を迎えようとしていた。「チコちゃん」。枕元に駆けつけた幼なじみが呼びかけると、閉じたままだった幸子の目が開いた。

義妹の和子(70)が、少し苦しそうに呼吸する幸子に寄り添う。よりあいの代表、下村恵美子(80)が写真を持ってきた。2週間前、入居者と職員らが熊本に行ったときに撮った。馬刺しを食べて満足そうに幸子が写っている。

幸子は50年間管んだ文房具店を営んで、長く一人暮らしだった。焼酎が大好き。脳梗塞で倒れ、よりあいと縁ができた。

入居後も、幸子は週に2晩はただ一人の身内である和子の家に泊まった。「もう一人はよか、今が一番幸せ、言うとりました」と和子は言う。

午後5時50分、下村が和子に声をかけた。「名前を呼んであげてください」「幸子ねえさん」。長い間をあけて呼吸を4回した後、幸子は83歳の生涯を終えた。

下村には12年前の苦い思い



⑤浜地幸子さん(左)の口に下村恵美子さんがスイカを運んだ
⑥村瀬孝生さん(左)と下村さん

「宅老所」の名称は20年前、ここから生まれた。当時は「託老所」が一般的だった。きっかけは、92歳の大場ノラがつくった。一人暮らしマンションはごみだらけ

今では当たり前になった「宅老所」の名称は20年前、ここから生まれた。当時は「託老所」が一般的だった。きっかけは、92歳の大場ノラがつくった。一人暮らしマンションはごみだらけ

「宅老所」の名称は20年前、ここから生まれた。当時は「託老所」が一般的だった。きっかけは、92歳の大場ノラがつくった。一人暮らしマンションはごみだらけ

「宅老所」の名称は20年前、ここから生まれた。当時は「託老所」が一般的だった。きっかけは、92歳の大場ノラがつくった。一人暮らしマンションはごみだらけ

いまも「通り」から始まり、事情に応じて「お泊まり」「住む」に進む。「お泊まり」は、風呂に入れてそのまますま泊まらせてという家族に「あなかがどうぞ」と下村は言う。初めて訪ねた家で、「お入浴なんてできない」「お入浴も同じ。居心地のいい場所になるまで待つて、95年に第2よりあいは、第3よりあいができた。その隣地では住まいとの計画が進む。100人余が1億2千万円の寄付した。入居が約束されではないのに、なぜ、下村と理想をともにし、運営を支えてきた村瀬孝生(47)はこう話す。「お金じ結びつきでしょうか。この輪に参加していれば、身寄りがなくとも、認知症でもなるって信用関係かな」

懸命に介護しているつもり家族から介護を奪っていきたくない。理由を尋ねると、娘は泣きながら言った。おはおむつを換えなかった風呂にも入れてあげていない。娘失格です。

特別養護老人ホームを辞めたばかりの下村が、大にヘルパーに入った。1991年11月、仲間と3人の茶室を借り、お年寄りが過ごせる場をつくる。大の場は、1度通ってきた。その後、境内に4畳半の部屋を借り、住んでもらった。

通う人が増えて1年後、今の家に移ることになった。さて、施設の名前をどうしようか。下村は最初「託老所」を考えた。大場が鼻を鳴らす。「年寄りを託すとは何ぞや」。もうちょっと考えなさい。確かにその通りだった。託すのは家族の立場。お年寄りが家と同じように過ごせる「宅老所」にしよう。

安心感はよく効く薬

日本の医療は、認知症に向き合っていない」として、厚生労働省が6月まとめた施策は、反省の始まりだ。

「私たちは、認知症の訴えを理解しようとするか、疎んじ、拘束する、不当な扱いをしてきた」と、精神科医の上野秀樹(49)一読して思った。「これのことだ」。千葉県旭市にある海上療養所の副院長。大医学部を出て、東京都沢病院には6年いた。去年は認知症の専門病棟を設けた。

妄想や幻覚、暴力的なで、行き場のない人が多家族も困っていた。入院で治療するのが最善だとした。暴れてどうしようもない人には強い鎮静薬を使い、ベッドに体を縛る。約1人を診た。7〜8割は症治まった。

2009年春、認知症専門病棟をつくる計画が、いまの病院に移る。「理想病棟をつくりたい」と燃えた。手始めに「物忘れ」を聞く。ところが、者は月に数人しかいない。護施設や自宅にいる認知症人たちの往診を始めた。



上野秀樹さん



新田國夫さん

この3年半で診た人は700人。入院を勧めたのは20人ほどだった。家族や施設と協力すれば、入院はほとんど必要ない。専門病棟をつくる計画は白紙に戻った。家族への支援こそが、入事だとわかり、携帯電話の番号を伝えた。「いつでもつながらる」という安心感は、下手な薬よりよく効く。家族が頼ると本人も落ち着きます。

寝ないというお年寄りの家族は疲れきっていた。認知症の人が通う宅老所を東北まで見学にいった。家庭的な雰囲気よかった。地域の福祉協議会に空き家を探してもらい、介護に参加したい人を募る。デイサービス施設を辞めた妻(62)ら6人の主婦が集まった。新田は月10万円の家賃と改装費100万円を渡し、97年、「つくしの家」ができた。運営も淡らに任せた。

スタッフは利用者とはほぼ同じ人数だったから、じっくり向き合えた。淡たちは、認知症の人の徘徊について歩いた。歩き疲れたところに、偶然を設けてあいきつし、お茶を勧める。毎朝、ハウレン草や小松菜を持ってくる農家の男性とは一緒に野菜の泥を洗い、料理が得意な女性とは食事の支度をした。

新田は驚いた。宅老所に通うようになると、お年寄りの不眠や興奮は治まり、薬がいらなくなった。必要なのは認知症の人と向き合う人手であり、入院ではない。北欧などの病院や施設を視察して、思いは確信に変わった。

介護で疲れた家族のため、04年にはグループホームをつくった。薬はなるべく少なく、介護は手厚く。今、3カ所に26人が暮らす。

認知症の人のケアに関して、医師は添え物でいい、と新田は思う。「何が有効かは、本人の立場になって介護する人が知っている。現場は医学を超えていることを、医師は知っておくべきだ」。厚生労働省の新たな方針が、入院偏重を改めるきっかけになるよう願っている。

(岡本峰子)

語り手にもなれるのに



六車由実さん

年前の春、静岡県沼津市
3車由実(42)はお年寄りが
の六デイサービス施設で働き
通うだ。すぐに80歳代の重い
始め症の男性が気にかかるよ
認知なる。

うに分間も座っていられず
5回。忙しく働く職員

歩き体操をしているほかの利
や、話しかける。その内容
用者に絡がない。みんなに迷
には脈れていた。

惑がら月後、男性を誘って女

4人でお茶を飲んだ。六
性と3性同士で沼津駅前の話
車は女いた。すると、男性が
をして沼津の生まれだ」と話

「僕もてくる。さらに「沼津
に入っ港の方に鉄道が走って
駅からよ」という。

たんだで生まれた六車も知ら
沼津だ。驚いて路線の名称
なかつると、「確か、じゃ、
を尋ねつ線だ」。どんな字で
じゃま「蛇に松だよ」

すか。が成立したことに六車
会話した。帰宅し、市史を
は満足また驚く。1974年
調べてになるまで蛇松線はあ
に廃線男性が話した通り線路
った。替えられていた。

も付け話を1時間ほどかけて
昔の会を設けた。38年の狩
聴く幾洪水の写真を見せる
野川大さな子2人を助けた思
と、小話す。メリヤス織機の
い出をンとして各地を飛び回
営業マたころの話も出た。

つていは男性の目の前でノ
六車を書き取った。「歩き
トに話知症の人」が、聞き書
回る認席に座り、語り手にな
きではた。

つていほど聞いた内容を編集
4回

し、「思い出の記」という冊
子をつくった。12月、別の施
設に入った男性に届けた。会
うのは2カ月ぶり。男性は六
車を覚えていた。「ありがと
う」。冊子を手を涙を流して
喜んだ。

六車は、大阪大の大学院で
民俗学を修めた。東北芸術工
科大学では7年余り学生を連
れて農村部を回り、お年寄り
に聞き取りをした。2008
年、准教授を退いて実家に戻
る。お年寄りに恩返しする気
持ちで、ホームヘルパー講座
に通った。

施設に来るお年寄りは昔の
遊びや歌、食事など、生きた
民俗資料の宝庫だった。認知
症が重くても、若い頃の記憶
はしっかりしている。六車は
介護の合間に聞き書きを続
け、体験を「驚きの介護民俗
学」という本にした。

大切なのは、聞く側の変化
だと思ふ。民俗調査のように
「教えて下さい」と聞き取り
する時は、食事やトイレの介
助をしてあげる介護職の自分
ではない。介護する人、受け
る人という関係がひっくり返

る「聞いてあげる」ではな
くて、聞かせて下さい。お年
寄りの機知や経験は、私たち
を豊かにしてくれます」

宮崎市の精神保健福祉士、
松田ヒトミ(56)は、精神科の
細見クリニックで認知症の人
のデイケアを任されている。
週に1度、お年寄りに昔のこ
とを話してもらおう。その言葉
を聞き書きボランティアが書
きとめていく。

聞いた話を1人ずつ仕分け
して編集すると、個人史がで
きあがる。冊子を手にしたお
年寄りは「娘にみてもらう
わ」と喜ぶ。家族は「こんな
気持ちだったんですね」。職
員も、個人史を読むことでお
年寄りを人生の先輩として尊
敬できるようになった。

今年2月、聞き書き作家の
小田豊二(67)が宮崎にやって
きた。松田がこれまでの取り
組みを報告すると、小田は言
った。「認知症の人も、その
話をしてる時って認知症じゃ
ないね」

確かにそうだった。お年寄
りが記憶にある昔のことを話
す時は、生き生きとして障害
が見えない。その時間をもっ
と長くできたら。

8月、松田は石川県であつ
た小田の講義に出た。全国か
ら看護師やボランティアら約
70人が集まった。「聞き書き
とは、聞き手と話し手が一体
になって泣いて笑うこと。命
はつながっている」。小田の
話に松田は聴き入った。

(岡本峰子)



松田ヒトミさん(左)と小田豊二さん

悲しいけどいとおしい

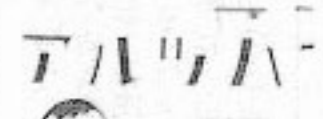
長崎市の岡野光江(89)は12年前、夫の覚を亡くし、ほどなくして認知症になった。着替えをせず、風呂もおっくろがる。家中の電気製品の電源を抜いた。7年前に脳梗塞で倒れて入院すると、症状はさらに重くなった。

長男の雄一(62)は地元タウン誌の編集者だった8年前から、光江の様子や家族の思いを漫画にしてきた。

「布団のへりを持って、見えない針と糸で縫い物のしぐさをする「みつえ」。息子たちの晴れ着の継ぎ当てをして」といふ。幻覚で現れ、「また来ます」という亡き夫には「おいしか酒は用意して待つとりますけん」亡夫や幼なじみが夢のように現れる。症状が軽かった頃、光江は言っていた。「ぼけたけん現れたとなら、ぼけることも悪かことばかりじゃなかかもしれん」

漫画は本になり、森崎東(84)の手で映画化が進む。「母ちゃんにお礼はせんばいかん。キャラ代払わんば」と雄一は笑う。

汚れた下着をたんに隠す光江は、漫画ではほほえましいキャラクターになる。でも、実際に片付けをする雄一は悲しくて情けない。「父



岡野光江さん(左)と雄一さん



族にも敵病を得た

映画監督、2年半前、浜市の実家に戻った。アルツハイマー病で認知症になった。介護し、介

「の関口祐加(55)は、29年間暮らした豪邸ハイマー病で認知症の母の宏子(82)と同居するために、護る前の宏子は良型だった。家業の興え、家中を磨き、米穀店を手料理を世間体を

「おもしろい人間と受け入れ」

「画を通して、若い」

「たよりに思える。誕生日を祝ってもらったことを忘れ、



関口祐加さん

「ぼけた、ぼけた」と歌う。小学生の孫娘と頭をたたき合い、「人をぶん殴るのって気持ちいいな」と笑う。祐加には今の宏子の方が魅力的に映る。だから、監督として被写体を選んだ。

映画「毎日がアルツハイマー」は各地で上映され、祐加も講演に呼ばれる。映画の中で順天堂大学教授の新井平伊(59)はこう話す。「アルツハイマーになっても脳全体が駄目になるのではなく、働きが悪くなるのは5%以下。残りの95%以上は正常です」。いら

「失敗を笑い話にして、宏子の不安を和らげる。「心のマッサージがあると思うんです」と祐加は言う。

認知症の人は300万人を超え。もはやありふれた病気になった。

(このシリーズは岡本峰子が担当しました。文中敬称略)

想は上記アドレスへ。